

## 運命と化した孤独

——コンラッドの短編「明日」について——

秋 葉 敏 夫

(1)

国や時代によって事情が異なるにせよ、小説の発表は最初は雑誌で行われることが多い。たとえ長編の小説でも、何ヶ月、何年にわたって雑誌に掲載され、それから単行本のかたちをとることになる。イギリスの場合、とくに19世紀中頃以降は、定期刊行物の増加によって、そういう傾向が強かった。この出版事情は、短編の場合も、ほとんど例外ではない。短編小説も最初は雑誌に発表され、そういう作品がいくつかたまってはじめて、1巻の短編集にまとめられるわけである。

そして、作品の掲載される雑誌は、やはり、さまざまである。すべてがいわゆる文芸誌ということではない。たとえば読者の性別、年齢、階層、興味などが、それぞれの雑誌によって異なるわけである。多少の例外は見られるにせよ、その雑誌にふさわしい作品が望まれることとなる。また作家のほうも、発表場所の継続的な確保のために、出版社側の意向に添うようにする。高雅なものはなかなか売れないので、いわゆる「金銭かせぎ」を目指して、そういう傾向を強くする作家が多く出ないとも限らない。

じっさい、この小論で扱うジョウゼフ・コンラッド (1857~1924) も、いわばそのような傾向と無縁ではない、作家のひとりである。彼の場合、ベストセラーの小説を書くのは、その作家生活の後期になってしまう。

それまでの彼は、借金に借金の連続で、まだ書かない作品を当てにして借金をする仕末でもあった。いわゆる出来のよい作品も執筆するのだが、一方では、「金銭かせぎ」のためと言われて仕方のないような作品を、彼はいくつも発表することになる。とくに手っ取り早く完成して売り込みやすい、中、短編の場合は、そういった傾向が強い。これらの作品はまた、コンラッドにとっては、継続的な緊張を強いられる長編小説執筆の合い間をぬって、「気晴らし」的に書かれたものも多い。

ちょうど20世紀が始まる年、1900年の7月に、コンラッドは長編『ロード・ジム』(*Lord Jim*, 1900)を脱稿した。そして、彼が次の長編『ノストローモ』(*Nostromo*, 1904)に取り掛かるのは、1903年1月のことである。それまでの彼は、フォード・マドックス・フォード(1873~1939)との共著の長編『ロマンス』(*Romance*, 1903)を抱えてはいるものの、ほとんど中、短編の執筆に専念する。じっさい、『ロード・ジム』完成後の2年強のあいだに、彼は5編の中、短編小説を発表し、その単語数を合計すると、およそ12万語にのぼる。比較的遅筆のコンラッドにとって、それは量的にはかなり充実した期間だったと言ってよい。その5編のうち執筆順に前の4編が、しばらくして、短編集『台風、ほかの物語』(*Typhoon, and Other Stories*, 1903)にまとめられる。この小論で考察する短編「明日」('Tomorrow', 1902)は、そのうちのひとつである。

短編「明日」は1902年1月に完成した。それが最初に発表されるのは、ほぼ半年後、雑誌「パル・メル誌」(*The Pall Mall Magazine*)8月号においてである。「明日」は長さはおよそ9,000語の作品で、その月刊誌に1回の掲載だった。はじめ、この「パル・メル誌」は文学や芸術に関心を抱く高級読者層を狙っていたが、その性格は実際はあまり反映されなかったらしい。時間の経過とともに、異国情緒豊かな物語や派手なアクションを売り物とする冒険小説や、家庭的な記事、子供向けの物語も、徐々に掲載されるようになる。コンラッドより一時代昔の作家たち、た

たとえば「メレディス、ハート、キップリング、ハガード、それにハーディは、自分の最悪の小説をいくつかこの『パル・メル誌』に発表した<sup>(1)</sup>」と評する者がいる。コンラッドの場合も、彼は「パル・メル誌」に5編の中、短編を寄稿することになるが、そのうちひとつを除くと、どれも傑作はおろか、佳作とも言い難い作品ばかりである。そしてそのひとつというのは、最初は、もっと純文学的で格調の高い、別の雑誌に発表される予定だった。

短編「明日」は、作家コンラッドが「パル・メル誌」に寄稿した2番目の作品である。それは同誌に掲載された彼の作品のうち、激しいアクションに欠けるのと非常に心理的な点で、かなり異色なものである。コンラッドにとっては、この月刊誌は彼の関係するほかの雑誌より、原稿料がやや高かった。それは魅力だったに違いないが、彼と「パル・メル誌」との関係はいわば事務的で、結果的には、同誌での作品発表が多くなることも、また一時期に集中することもなかった。

なお、この作品は、作家コンラッド自身の手で、舞台用に脚本化された。そして実際に、上演されてもいる。彼としては、これはお気に入りの作品でもあったらしい。この小論は、そういう短編「明日」について、その主題と方法を中心に考察するものである。

(2)

短編小説の性格は、本質的に、長編小説とは異なるものである。その特徴は、ものごとの「凝縮」と、それを武器とする「強調」にある。余分なものはそぎ落とされ、暗示や象徴の効果を借りて、主題をくっきり浮かび上がらせる。つまり、主要な登場人物の数は少ないし、時間的ならびに空間的に、ひとつの場面、ひとつの状況が扱われる。ストーリーは必然的に、脇道にそれたり複雑になることはめったにない。そして、

すぐれた短編小説はその「単一効果」により、短時間で、扱う問題を読者にはっきり印象づけなければならない。それにまた、これは読書の喜びでもあるのだが、傑作、佳作といわれるものは、読後の妙なる余韻を生み出しもする。心地よいかどうかは別として、もしその作品を読まなかったら考えなかったかもしれないものごとについて、たとえわずかな時間でも読者にじっくり考え込ませる成果を、そういう短編小説は持つのである。

コンラッドの作品「明日」は、主題も方法も、見事なほど短編小説の特徴に依じて、書き抜かれている。たとえば、主題にからむおもな登場人物は4人だが、そのうち1人はほとんどしゃべらず出番も少ないので、その数は3人といって差し支えない。時間は過去への言及を除いて半年ほどの経過があり、それでも、場面や状況がほとんど変わらないので、ここでは、その時間の経過はものごとの繰り返しを読者に意識させるだけである。単純なストーリーは脇道にそれないし、待ち遠しかったアクションはようやく後半に1度起こるにすぎない。問題は、こういう状況下で、提示される主題は何か、その提示が効果的になされているかどうかである。とりあえず、その検討を試みるために、短編「明日」のストーリーを簡単にまとめてゆこう。

舞台はロンドンからそれほど遠くない港町、コウルブルックである。そこにもと沿岸航路の船長ハグバードが住んでおり、家出した息子の帰宅を待っている。ハグバードは二軒長屋の貧弱な田舎家を持っていて、その片方には自分が住み、他は引退した船大工、ジョサイア・カーヴィルに貸している。カーヴィルはいまは視力を失っており、自分では何ひとつできず、身のまわりの世話を娘のベッシーに頼っている。「家庭の暴君として評判の悪い男」とは彼のことである。おもな登場人物はこれらの4人で、舞台の港町はどこか狭い閉じられた世界ということ以外に、特別な意味が隠されるわけではない。そして、時代背景は明確に言及さ

れてはいないものの、作品執筆時とあまり変わらないと考えてよい。

コウルブルックの床屋（彼は導入部にだけ登場し、そこで語り手のような役を勤める）の話によると、ハグバード船長は3年前、妻を失くした直後に、この港町に現われ住みついた。それというのも、彼はロンドンの新聞に息子搜索の広告を出しており、一通の手紙で、息子がコウルブルックに来たことがあるのを知ったからである。こうして、息子の行方を探す父親の愛情の深さが強調されるが、息子の家出はすでに16年前のことであり、ハグバード船長は息子の身体つきをもはや説明することができない。いまだに14才かそこらの少年、「利口そうな顔の、快活な男の子」と、この老船長は考えているのである。だからといって、彼がもうろくしているわけではないが、彼はただ息子のことになると、まるで狂人のように振る舞う。そして時間の経過とともに、その活発な搜索活動は弱まったものの、彼の心のなかでは、息子の帰りがいまや「来週」「来月」「来年」ではなく、とうとう「明日」ということになっている。

そして、導入部はおおよそ以上のような背景と状況説明が中心であり、それは作品全体の7分の1強を占める。ストーリーの展開は、短編小説の特徴にふさわしく、ここではただひとつのアクション、ハグバード船長の息子の帰りに焦点が置かれる。ただし、家主である船長を黙って見つめるベッシーの姿、「黙ったまま、よく伺っているので分かっていますわというように、そしてそこには、事情をちゃんと呑み込んでいて、期待し願望しているような様子があった<sup>(2)</sup>」と描写される彼女の姿を、見逃すことはできない。読者の興味はその描写にも引き付けられるわけで、彼女のその態度はどうしてなのか、そこには具体的にどういう意味が隠れているのかは、ストーリーの先で明らかにされるのを待たなければならない。

次の展開部は作品全体の半分以上を越えており、おおよそ前半部と後半部の2つに分かれる。前半部はさらに状況説明が続き、中頃にハグバード船

長の息子が登場して、事態が解明されるかに見える。ただし、ものごとはそこですんなり解決されるわけではない。ストーリーが予期しない方向へすすむ意外性こそ、作品「明日」の核心でもある。

ハグバード船長の説明では、息子は来年の7月には31才となり、いかにも結婚適齢期を迎える。そこで彼は、「明日」帰る息子のために、その準備に余念がない。彼にとって、いまや、すべては息子のためである。庭の小さな畑を耕しても、彼は何を植えるかは息子の選択にまかせようとする。また、家具も着々と購入していて、息子が最初に見るまでは、それを誰にも見せない。そして彼が息子の嫁に考えているのは、ほかならないベッシーなのである。彼女のほうは、船長に息子がいるのさえ確信できないものの、大家の気嫌を損ねないように、信じるふりをしている。1度船長の思いや夢に疑念や不安を差しはさむと、彼女はすごい見幕で怒られた。ベッシーも、恋人がいるわけではないし、盲目の老父の世話に明け暮れる毎日であり、気嫌のよいときは、船長の息子ハリーの妻になることを暗黙のうちに了解している。彼女のほうも、いわば船長の狂気の夢に押し切られ、その息子を待ち、彼と結婚する期待と願望が、心のなかに強く育っているのである。

展開部の前半では、このように、いくつかのエピソードを混ぜながら、「現在」の状況が細かく描かれる。すでに、港町の人々はハグバード船長を狂人だと批判するようになっていく。じっさい、ベッシーの老父が肉体的にできないのと同じように、ハグバード船長は精神的な異常さから、現実の世界をまともに見つめることができない。その2人の老人の描写は対比の妙を得てあざやかだが、その間にはさまれ「出口」のないベッシーの姿が、同時に痛ましく浮かび上がる。

時間は1日1日と経過してゆく。ストーリーが展開部の後半に入ると、はじめて、この作品のアクションの部分になる。ある日の夕方、ひとりの男が通りがかり、ハグバード船長の姿をとらえ、彼に話しかける。そ

の男は微笑みながら、息子さんの広告を出していましたねと言い、家に入れてくれないかと頼む。ハグバード船長は、息子は少年時代から自分にそっくりだったと説明していたが、長い年月が経ったとはいえ、その男が誰だか分からないし、また誰だと確かめようともしない。彼は、「あんたを家に入れてくれだって、ほんとに。そんなことをしたら、いったいハリーはなんて言うだろう」と答える仕末である。狂気と化した信念、あくまで「明日」を信じ、「今日」を無視して生きようとする、歪んだ信念が、こうしてたくみに描き出される。ハグバード船長はあわてはしたものの、自分の家に入り、中からかんぬきを下ろしてしまう。

そして、突然の話し声を聞きつけて出て来たベッシーと、その男との会話になる。男は自分がハグバード船長の息子だと名乗り、船長が息子の帰りを待っているのは「明日」だと知ると、「でも、なぜ今日ではいけないんだ」と素朴に尋ねる。事情がよく分からない人間のことばとはいえ、それはまさに、永遠の「明日」に生きる、船長の狂気と化した「生き方」を指摘している。船長にとっては、いまや、「明日」が実現してはいけないのである。

ところでその男は、ロンドンに友だちがいて、遊ぶための金をもらいに來ただけにすぎない。男はドアをたたき、家の中へ入れてくれるようになおも頼むが、その願いは聞き入れられない。2階の窓からベッシーに向かって、「そんな男と関わりを持つんじゃない。何もかも台なしになってしまう」という声が響き渡るだけである。作家コンラッドは、ハグバード船長の生きるための計画がまさに揺るぎないものになっていた、と繰り返し強調する。ベッシーはその男がハリーだと証明できるものを求めるが、船長とうり二つの顔つきを心の中で認めざるを得ない。しばらくすると、彼女はわがままな老父に呼びつけられ、家の中へ入ってゆく。展開部はおよそこのあたりまでと考えてよく、次はベッシーを巻き込んだ船長の夢の行方を扱う、クライマックス部へストーリーはすすむ

ことになる。

このクライマックス部もかなり長く、作品全体のおよそ7分の2弱を占める。ここで描かれるのは、ベッシーと思いがけず現われた船長の息子ハリーの会話を中心である。具体的には、後者が港町コウルブルックにもどってきた理由や、彼の現在の状況と生活信条などが明らかにされる。そして、ハリーの話を聞き、その意外さに幻滅するベッシーの心の反応が、作品「明日」を理解するための重要なポイントとなる。なお、この場面では、ハグバード船長は家の中に閉じ込められたままだが、2人の様子をこっそりうかがう気配がある。

ベッシーが再び家から出て来て、ハリーに職業を、またどこからもどって来たのか尋ねる。さらに、ここへ来た理由も尋ねる。彼女が知ることは、ハリーはロンドンから5ポンドの金をもらいに来ただけで、それも酒代を支払えなくなったから、というにすぎない。彼の話だと、仕事はさまざまなことをしてきている。ハリー自身、「今までおれは、洋服屋と兵隊を除いて、ほとんど考えられるものは何でもやってきた」と豪語するのである。そして、彼はふと口ずさむ歌を説明し、自分はガンバシーノ（砂金が出る川や金鉱を捜し回る人）に憧れると言う。彼の理解では、ガンバシーノは誰にも指図されずに1人で行動し、必要以上の金を持たないで、次から次に場所を移る。ハリーは無邪気なほど自由気ままな生活に憧れているのである。ただ現実には、それを遂行する堅固な意志と根気が彼に十分あるかどうかは疑わしい。ベッシーは淡い期待を抱きながら、こういう話を聞く破目になり、その途方もない展開にあっけにとられ、ほとんど泣き叫びたい思いにかられる。彼女は少なくとも、そんなハリーはまったく家庭向きでないことを知らなければならない。

こうして、緊迫感を徐々に深めながら、2人の会話はなおも続く。ハリーの言動は少しも地に着いていないことが、繰り返し暗示される。ところで、彼は朝から何も食べていないし、帰りの汽車賃も満足に持って



いない。彼は女性に一目惚れする性質だと言い、ベッシーをもう恋してしまったとおだてる。空腹の彼の狙いは、ただ食物を少しせしめることにすぎない。そして、息子が結婚して落ち着くのをハグバード船長は望んでいると聞いて、彼は驚く。おそらく親父のことだから相手の女性をすでに見つただろうと推測し、ハリーはその女性が誰だかベッシーに尋ねるのである。作家コンラッドは、それに対し、直接ベッシーに答えさせるのではなく、次のようなたくみさで、相手の女性をハリーに理解させる。

2人は口がきけないかのように黙っていた。老船長は窓のところでやきもきし、何かつぶやいた。とつぜん、突き刺すような声で叫んだ。「ベッシー——あんたの姿が見えるんだよ。ハリーに言い付けるぞ」

彼女は逃げ出すように動いたが、立ち止まり、両手をこめかみに当てた。ハグバード青年は、黒っぽい大きなかたちで、ブロンズ像さながら少しも動かなかった。2人の頭上で、狂った夜が老人の声となって泣きわめき、しかったのだ。

「ねえ、追い払ってしまいな。ただの流れ者にすぎないんだ。あんたに必要なのは自分の心地よい家庭だよ。そいつには家庭なんかない——ハリーに似てなんかいない。ハリーのはずがないよ。ハリーは明日帰ってくるんだ。聞いているのかい。あと1日だよ」老人はさらに興奮してわめいた。「心配するな——ハリーをあんたと結婚させてやるから<sup>(3)</sup>」

こうして、自分の結婚相手がベッシーだと分かっていても、ハリーの性格が変わるわけではない。クライマックス部の見事さは、ベッシーのいじらしい期待と、それに残酷な衝撃を与える緊迫感の高まりである。ハリーが無邪気で得意気にしゃべるだけに、ベッシーの幻滅感は皮肉にも痛

ましく増大する。ものごとの焦点はハリーの生活信条ではなく、そのベッシーの幻滅過程に置かれており、作品「明日」の主題は彼女を取り巻く状況にあると理解できる。

やがて、ストーリーは結論部を迎える。この結論部は単語数およそ900ほどで、その後のいきさつを締めくくるだけである。ハリーは父親の計画した自分の結婚相手がベッシーだと分かると、「1週間滞在したい」とお世辞を言う。ただし、彼の狙いは帰りの汽車賃をせしめることにすぎない。結局、彼は半ポンド金貨をもらい、いわば追い払われるかのように、その場を立ち去るのである。暗い、人気のない道に向かって、「行って！ 行かないで！」と叫ぶ彼女の声も、周囲の暗闇の中に消えてゆく。

ところで、作家コンラッドが短編「明日」で試みるのは、基本的には、親子の関係、夫婦となったかもしれない人々の関係である。ただ、おもな登場人物4人のあいだに、暖かな気持ちの流れることは少しもない。親が「家庭の必要と妥当性、それに団らん喜び」を主張しても、子供は「親父はおれを思い通りに支配したいだけだ」とわめく。ハグバード船長も息子のハリーも、またベッシーの盲目の父親も、それぞれ自分の殻に閉じ込もっているだけである。彼らは誰も、その殻から出ようと譲歩することはない。そして、この3人と多少の人間関係を持つベッシーも、それぞれの心の中へ入ってゆくことができない。オズボーン・アンドリーズのことばを借りると、彼女の孤独は、「現実の理解のために想像力を使う代わりに、それを誤用し、わずかな現実で粉碎される、幻想の世界を作り出す<sup>(4)</sup>」ほどのものである。彼女は結局、2人の老人だけでなく、ハリーの自分勝手な思いに、ただ振り回されるだけにすぎない。ベッシーの性格に優しさや素直さが秘められているために、彼女の孤独が見事な悲劇性を帯びて浮かび上がる。

じっさい、ハグバード船長の生活ぶりは、すべて息子ハリーのためだった。永遠の「明日」を待つ彼の狂気は、まさに「生きること」と結び

ついている。彼にとっては、その「明日」が実現してはいけないのである。その「明日」が実現しなくても、彼は少しも困らない。ところが、彼の狂気の夢を無理矢理持たされ、その「明日」に淡い期待を抱いたベッシーは、現実となったその「明日」の正体に接し、深い絶望に陥る。少なくとも彼女の場合、「出口」や「逃げ道」はどこにも見つからないのである。作家コンラッドは結論部の終わり近くで、かなり仰々しく、その状況を次のように書いている。

ようやく彼女は、自分を呼ぶ老父のわめき声を聞いた。そして運命に圧倒されるかのように、息詰まる小さな地獄のような家に向かって、静かによろよろ歩き始めた。そこには大きな門はなく、失われた希望の恐ろしい碑銘もなかった——彼女はどこに罪を犯したのか分からなかった<sup>6)</sup>。

ベッシーの「逃げ道」のない日々の生活と淡い期待の粉碎を通し、作家コンラッドは、人間存在のまさに悲劇的な、「運命と化した孤独」を扱ったのだと考えられる。そしてそれは、短い作品ながら、クライマックス部に向けて徐々に緊迫感を高めながら、見事に描き出された、と言ってよいだろうか。

多くの場合、ものごとは比較感で決定される。たとえば2つのものが両方とも悪くても、比較感から、片方はそれほど悪くないということになる。短編「明日」で描かれるベッシーの孤独がこれほど徹底していると、多少の孤独は看過されてしまうのである。ギリシャ悲劇をはじめ、正統的悲劇が持つと同じように、この作品の「運命と化した孤独」も「生きる希望と活力」を人々に与える要素が含まれる。作品「明日」は、ただ人間存在の「孤独」を見事に描いた佳作というだけではない。それは同時に、その「孤独」の徹底さ故に、陰うつではなくむしろ励ましの、

余韻を残す作品でもあるだろう。

## NOTES

テキストは Joseph Conrad: *Typhoon, and Other Stories* (London: J. M. Dent and Sons, 1954)を使用した。後注における頁数はそれによる。

- (1) Lawrence Graver: *Conrad's Short Fiction* (Berkeley: University of California Press, 1969) p.91.
- (2) Joseph Conrad: *Typhoon, and Other Stories*, p.233.
- (3) *Ibid.*, p.274.
- (4) Osborn Andreas: *Joseph Conrad, A Study in Non-Conformity* (London: Vision Press, 1962) p.81.
- (5) Joseph Conrad: *Typhoon, and Other Stories*, p. 278.